

教育芸術社

「中学生の音楽」「中学生の器楽」

拡大教科書の特徴

1. フレーズのまとまりや、曲の仕組みが分かりやすい楽譜

音楽科の場合、楽譜から「フレーズのまとまり」や「楽曲の仕組み」を読み取ることが学習の焦点になるケースも少なくありません。しかし、拡大教科書において通常の縦長の判型では、1段に2小節あるいは3小節しか掲載することができないため、一般的な「4小節のまとまり」を視覚的にとらえることが難しくなり、通常の教科書との差異が生じてしまいます。

また、歌唱あるいは演奏している際に楽譜を頻繁にめくらなくてはいけない、さらに反復の際には大幅にめくり戻さなければいけない、などの不都合も生じます。

それらに対処するため、縦 290 mm、横 290 mmという正方形の大判判型を採用し、4小節を適切な大きさと掲載することで、合唱の楽譜でも複数段を俯瞰できるように工夫しています。

2. 文字サイズと書体

本文の文字サイズは、基本的にすべて標準規格上もっとも汎用性の高いと思われる 22 ポイントにしています。また、フォントは太さの差がない「じゅん 201」を採用し、画数の多い漢字を判読しやすいように配慮しています。

なお、タイトルや脚注、吹き出しなどでは、サイズを若干大きく、あるいは小さくしていますが、書体は本文と同じ、あるいは「新ゴチック」「新丸ゴチック」などの見やすいものを使用しています。

3. 白抜き文字の変更

一般に、白抜き文字は背景の色にまぎれて見えにくいという状況を踏まえ、原本教科書において白抜きになっている部分はすべて通常の表示に変更しています。

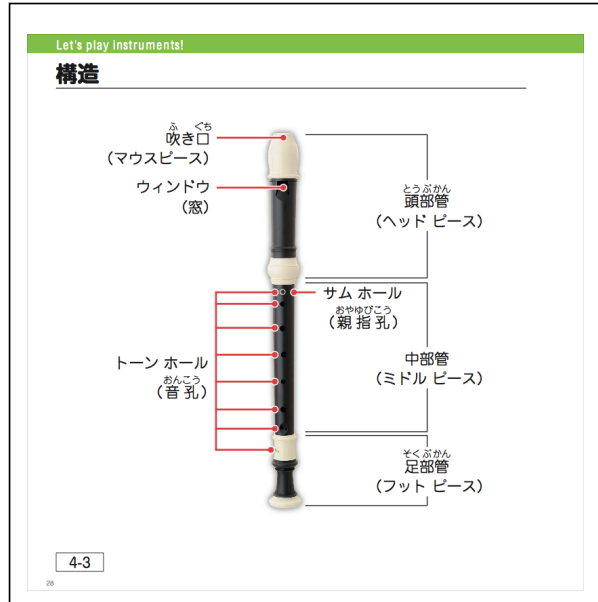
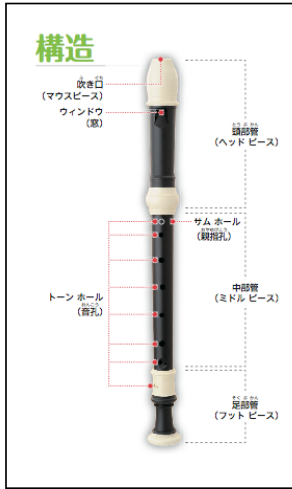
4. 図版の変更

原本教科書において、点線や細い線で示している部分は、より見やすくなるように太い実線に変更しています。

例)

原本教科書（中学生の器楽 p. 4）

拡大教科書（中学生の器楽 p. 4-3）



5. 軽量で開きのよい用紙

音楽科の場合、必ずしもページ順に学習を進めるとは限らないので分冊は適していません。そのため弊社では1冊にまとめていますが、その際に過度に重くなることは避ける必要があります。

また、特に「中学生の器楽」は教科書を机に置いて学習を進めることが多いので、開き易さやめくり易さはたいへん重要な要件と考えられます。

その点を考慮して、重量が少なく、開きのよい薄めの用紙を採用しています。